清郷型鍋再考

永井宏幸

はじめに

拙稿「奈良・平安時代の土師器甕について」では、7世紀半ば～11世紀初頭の土師器甕を5段階に大別、10段階に細別できる可能性を示唆した。その際、10世紀代に成立する「清郷型鍋」は除外して編年を進めた。理由としては、土師器甕の変遷から煮炊具を捉えようとしたためで、鍋形土器である「清郷型鍋」はあえて除外したことにある。さて、今回は10～12世紀代の清郷型鍋を中心に煮炊具の変遷を追ってみようと思う。

1．問題の所在

1．1 研究史素描

先駆的な業績としては、岩野見司氏があげられる。氏は『日本の考古学』Ⅵのなかで、一宮市清郷遺跡と新城市馬場遺跡出土資料の「清郷型鍋」を紹介している（岩野　1967）。また、『新編一宮市史　資料編四』（岩野ほか　1974）では、「伊勢湾周辺の一つの形態と考え「清郷型」と呼びたい。」とし、清郷遺跡竪穴遺構出土資料を基準資料とした。氏は清郷型をこのなかでA～Cの3類に分けている。ただ、型式学的にはAからCへと変化すると示してはいるものの、編年的な位置付けは、資料的な制約から控えている。

岩野氏による「清郷型甕」の提唱以降、資料的な増加にもかかわらず、編年的な位置づけ、あるいは機能的側面、分布・流通的側面など本来であれば多岐にわたる問題点が論議されぬまま10年近く研究は停滞していた。その後最近までに2本の論考が発表されている。ここでは2本の論考を紹介して、本稿の指針としたい。

野末浩之氏は、「愛知県内における11～13世紀の煮沸形態」と題した論考を発表している（野末　1988）。このなかで氏は、清郷型のほか、伊勢型鍋、常滑窯製品などの分類・編年・分布を整理している。清郷型については、尾張と三河の地域性を示唆している。また、清郷型を伊勢型鍋とともに広域流通型の製品として評価している。

佐野五十三氏は、「清郷型甕の研究」と題した論考を発表している（佐野　1990）。氏は編年・分類より分布や口径値に注目している。分布については、「伊勢から駿河までの海岸よりの平野部に分布」するとして、伊勢型鍋と同様に広範囲に分布する製品として捉えている。口径値については、遺跡毎に口径がほぼまとまりをもつとし、在地生産の製品として捉えている。そして結論として、「東海地方における広域交易圏成立の背景として、寄進地系荘園の拡大に伴う物資の流通体系が重要な要素の一つであると思われる。そして荘園領主への物資の輸送は、律令的な陸路による人担方式ではなく、少人数で大量輸送の可能な船による海上交通の発展が前提となる。」としている。

1．2 本稿の指針

本稿の指針は従来の諸研究の再考にある。したがって、分類や編年的な位置づけが大幅に変わるものではない。特に分類については、清郷型鍋がほとんど1型式上に列ぶことが岩野氏の分類以来指摘されており、なんら変更の余地はない。ただ、城ヶ谷和広氏の指摘した「三河型甕」からの系譜

上で捉えようとすると、2系列考えられる。すなわち、口縁部が体部とほぼ同様の厚さとなるもの、口縁部が肥厚するものの2系列がある。本稿では大きく2つの型式を提示し、それらの型式変化を考えてみたい。

編年については、清郷型鍋と灰釉陶器および灰釉系陶器などとの共伴関係からおおよそ10世紀代から12世紀代までにおさまると考えられている。本稿では清郷型鍋は「三河型甕」にその一系譜が求められるとして捉えているので、対象を9世紀まで遡って見ようと思う。

分布については、さきに紹介した佐野氏の論考を参考にした。胎土については、堀木真美子氏のご助言をもとに肉眼観察で行った。

これらの分析項目の上に、消費地遺跡の空白部分でもある古代から中世における土器編年の再考を「清郷型鍋」を中心に行うのが本稿の目的である。

2．清郷型鍋の特徴

2．1 清郷型鍋の特徴

清郷型鍋（甕）の特徴は『日本の考古学』Ⅵのなかで岩野氏が次のように記している(岩野　1967)。「口径は24cm前後で、(中略) 口縁部は2～3cmの厚さをもつ。肥厚した口縁部は轆轤にて整形し、くの字形に屈曲させ、口縁部をさらに外方にひく。内側に明瞭な稜線を示す。いずれも無文で口縁部などに煤の付着をみる。」

清郷型鍋の特徴は以上の岩野氏による説明をもとに認定されてきた。ここでは、岩野氏やその後の研究をもとに清郷型鍋の特徴を以下のように整理する。

まず、「なぜ『甕』ではなく『鍋』なのか？」を説明しよう。

伊勢湾周辺、特に濃尾平野あるいは三河部では甕形土器はおおよそ8世紀代にはすべて長胴・平底になる。ただ、畿内（都城）色の強い伊勢地域は平底化することはない。一転して10世紀代になると尾張部を中心に再度球胴・丸底化してくる。球胴（半球形）・丸底化の影響としては、いわゆる伊勢型鍋の祖型と思われる口縁部を折り返すタイプの鍋（甕）形土器や平安京Ⅲ期に見られる羽釜形土器（摂津C型）があげられる（菅原　1983・新田　1990など)。このタイプの土器に相前後して登場するのが「清郷型鍋」である。

このように器形的側面からは球胴・丸底への変化がおおよそ摑める。また10世紀代以降、煮炊具の器形的な変遷を考えると、いわゆる円盤状の平底を持つタイプは認められない。そこで本稿では、長胴・平底タイプを「甕」とし、球胴・丸底タイプを「鍋」と呼ぶことにする。

では、機能的側面はどうか？長胴・平底タイプは概してカマドで使用されている。煤の付き方や2次焼成による赤変する箇所から、下方からの被熱より横方からの被熱を受けていることがわかる。一方、球胴・丸底タイプは煤の痕跡などから被熱をほぼ全体に読みとれる。したがって、加熱方法からも長胴・平底と球胴・丸底とは区別する必要がある。

以上の理由から、つぎに示すように従来「清郷型甕」と呼ばれてきた土器を「清郷型鍋」と呼ぶ。ただ、「清郷型鍋の系譜」の項で示すように平安京Ⅲ期にみられる土師器「羽釜（土釜)」と器形が酷似する点を加味すると「羽釜形土器(土釜形土器)」とすることが名称として統一が取れるのかもしれない。

さて、清郷型鍋の特徴は岩野氏が示した特徴に大幅な訂正はない。以下に示す諸特徴は従来の諸説を要約したものとなる。

(1)　全体の器形は羽釜状、鍔に相当する部分、すなわち口縁部が強く折れ曲がり「L」字状あるい

は「く」字状となる。口縁部は肥厚するものと体部と同じ厚さのものとがある。体部はほぼ球胴あるいはやや口径より長くなる。底部は丸底。

⑵　分布は伊勢湾周辺、愛知県内を中心に、三重・静岡県・岐阜県までの広がりを持つ。特に、佐野氏が指摘するように「中小河川、海岸の近くに立地する遺跡」に多い（佐野　1990）。

⑶　口径（内径値）の比較をすると、大型（25cm前後）・中型（21cm前後）・小型（16cm前後）の３種類に分かれる。特に中型品が多い。

⑷　口縁部の製作技法に特徴がある。体部と口縁部の接合面の観察から、体部の内外面を包み込むように接合している。口縁を観察すると、断面形状が「N」字状、口縁端部付近が凹状となる。なお、体部は粘土紐積上となる。

⑸　胎土に特徴がある。どの土器にも石英・長石と黒雲母が混入する。一般的にこれらの鉱物は西三河（矢作川流域）に多く見られる。

２．２　分布（表－１）

分布については佐野氏によってほぼ網羅されている。ただ静岡県内の資料が中心と言うこともあって、他県は代表的な出土遺跡の紹介に留まっている。本稿では愛知県内の資料に関してはできる限り網羅的に集成を行った（既報告分で32遺跡）が、静岡・三重県については佐野氏の集成に拠った。

さて、佐野氏の集成から読みとれることに、「海岸よりの平野部」「中小河川」がキーワードとしてあげられる。本稿で特に愛知県内を中心に既報告を再整理したところ、知多半島の付け根にあたる東海市松崎貝塚・大木之本遺跡、渥美半島の田原町山崎遺跡など半島部にも散在することがわかってきた。さらに一宮市清郷遺跡の位置する尾張北部の木曽川を挟んで対岸にあたる岐阜市御望遺跡、関市重竹遺跡にも散見することがわかった。

基本的には佐野氏の見解と一致することとなるが、伊勢湾岸北部あるいは三河湾岸にその分布が集中し、特に尾張北部や木曽川を挟んで美濃平野にも分布することがわかってきた。したがって、海上あるいは河川による水運流通の商品ではないかとも想定できる。

２．３　分類

先に示した通り、大きく２系統に分ける。

三河甕系

三河甕系は、８世紀代に成立する三河型甕（図２－１～３参照）と呼ばれる「口縁部を鋭角的に折り返す、ハケメを全く持たない甕(城ヶ谷　1991)」や把手の付く鍋形土器に系譜を持つ鍋。東三河地域を中心に見られる。一宮町西浦遺跡ＳＢ－１出土資料を指標とする。全体の器形・調整は羽釜系鍋と類似するが口縁部が肥厚しないで「く」ノ字に屈曲する点に相違がある。典型的な三河甕は口縁がＬ字状に鋭く屈曲するタイプを指すが、10世紀前半になると口縁部が立ち上がり、三河甕系の口縁に近づくようである。

Ａ類（図１－１）

口縁部が「く」ノ字に折れ、やや長胴気味の器形。底部は不明ではあるがおそらく丸底になる。調整は外面がユビナデ、内面は横方向の板ナデあるいはハケ。いわゆる「三河型甕」からの型式変化したもの。

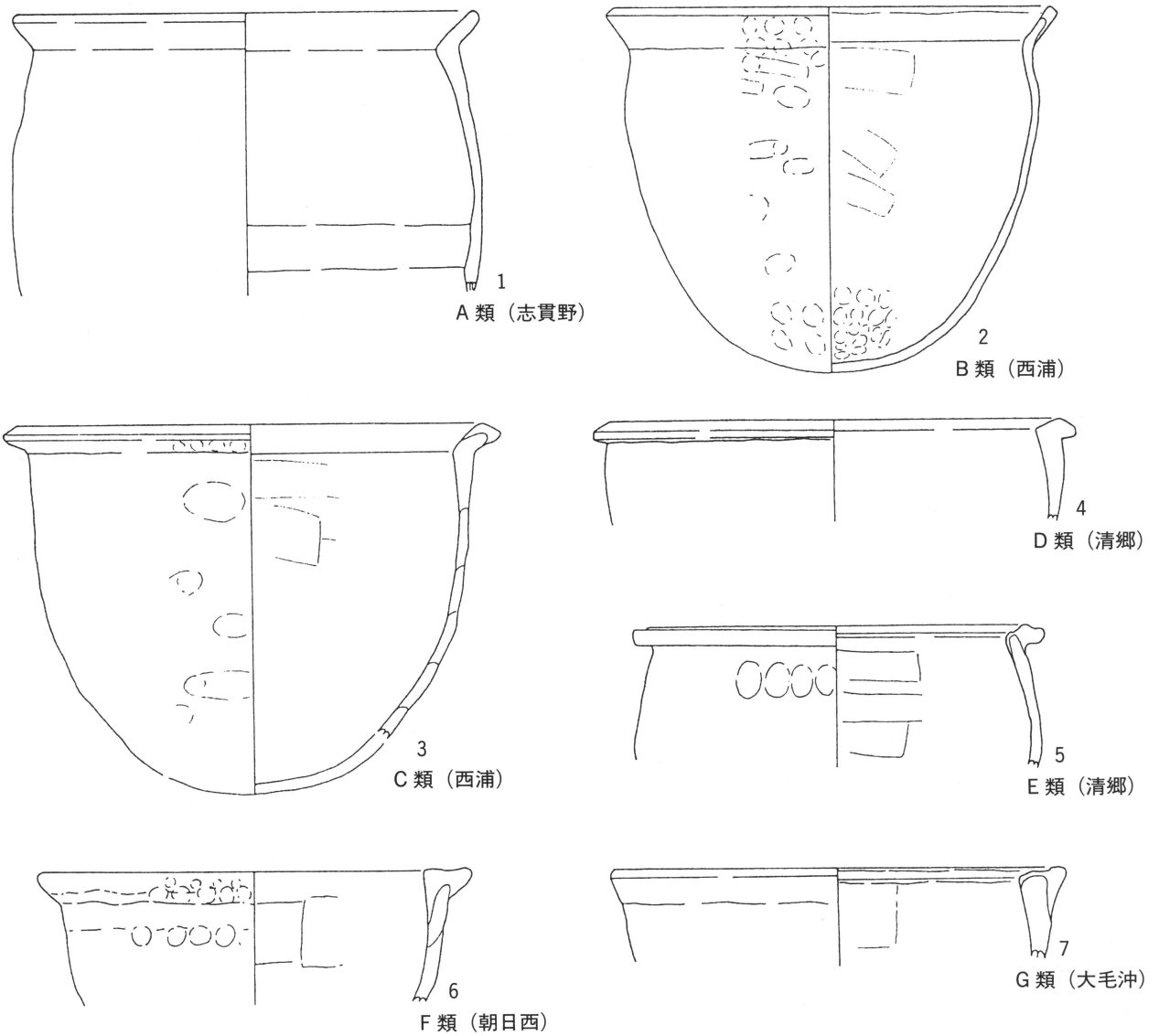
Ｂ類（図１－２）

Ａ類との相違点は器形にある。器形は羽釜系と同じくほぼ球胴となる。口縁部から体部にかけては、「く」ノ字になるため、ややくびれる。その他はＡ類と同じ。

羽釜系

平安京Ⅲ期にみられる「羽釜」形土器（摂津Ｃ型）に類似するタイプ。岩野氏以来「清郷型甕」と呼ばれてきたものを指す。「清郷型鍋の系譜」の項でも触れるように金属器の羽釜の模倣品の可能性がある。

《分類》S＝1/4



《製作過程》

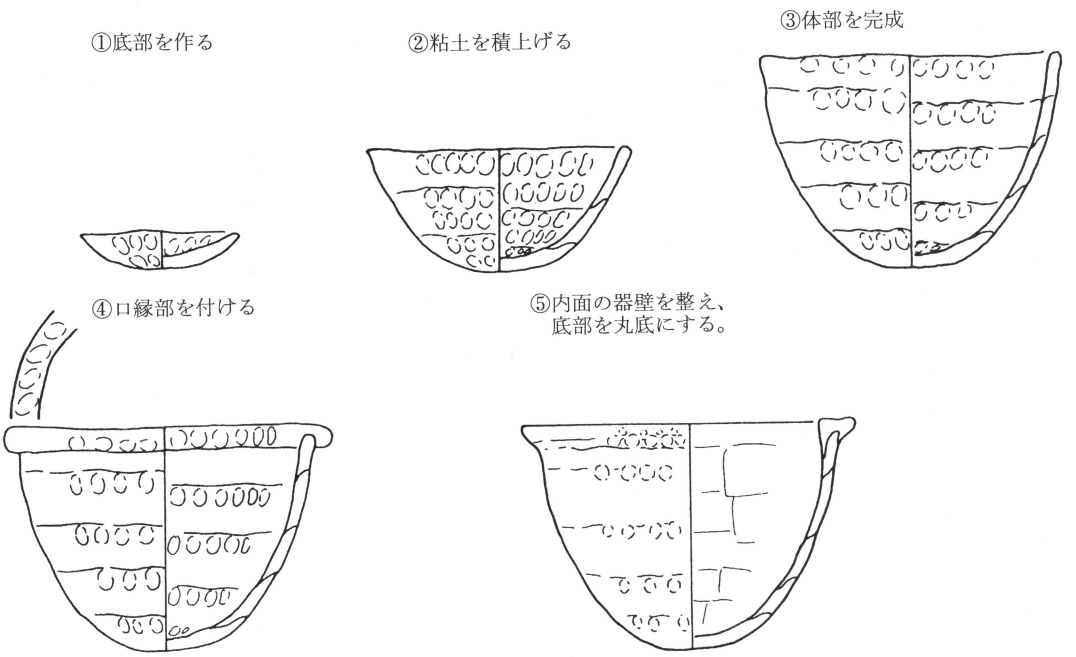


図１　清郷型鍋の分類と製作過程

C類（図１－３）

西浦遺跡ＳＢ－１土資料を指標とする。器形などはＢ類と同じ。ただ、口縁部はやや肥厚する。口縁端部はヨコナデにより面取りがなされている。口縁端部か水平方向になるものと斜め上方になるものとがある。さらに口縁部が短く終わるもの(新相）とそうでないもの（古相）で時期差になる可能性がある。体部の調整は外面が成形段階のユビオサエが多少残るものの、基本的にはナデ調整、内面は横方向に板ナデを行い、一見ミガキ調整のように丁寧になされる。

D類（図１－４）

岩野分類のＡ類に相当する。口縁部が「く」ノ字に短く屈折し、口縁部を水平あるいはやや下方に引き出すタイプ。断面形状が三角形の鍔状の口縁となる。口縁内面に強い稜線をもつ。体部の内外面調整はＣ類と同じ。

E類（図１－５）

岩野分類のＢ・Ｃ類が相当。口縁端部に体部と接合させるために連続する指頭オサエをしたのち、強いヨコナデを行う。そのため凹線状にくぼみを持つタイプ。ヨコナデが弱くなり、口縁部が「N」字状になるものが岩野Ｃ類に相当。体部の内外面調整はＣ類と同じ。ただ口縁部と体部の稜線がはっきりとしないものも相当量ある。

F類（図１－６）

朝日西遺跡ＳＫ271出土資料を指標とする。口縁部を水平方向に短く引き出し「L」字状となり、断面形状が直角三角形のタイプ。体部の内外面調整はＣ類と同じ。灰釉系陶器や伊勢型鍋とも共伴する。

G類（図１－７）

大毛沖遺跡93Ｇ・ＳＫ17出土資料を指標とする。基本的にはＦ類と変わらない。ただ、口縁部の接合が粗雑になり、鍔状の張り出しが小さい。したがって、口縁部の面取りはほとんどなく、丸みをもつようになる。灰釉系陶器と共伴する。

以上の分類のほか、三河甕系（Ｂ類）と羽釜系（Ｃ類）の折衷型も三河部を中心にみられる。

３．編年

３．１ 清郷型鍋の系譜

清郷型鍋の系譜は一体どこにあるのか？従来の研究ではあまり振れることのなかった命題である。ここでは、「分類」の項で提示した「三河甕系」と「羽釜系」に分けて清郷型鍋の系譜を考えてみたい。

三河甕系

先に紹介した城ヶ谷氏・北村和宏氏(北村　1991)松井直樹氏の見解など（松井　1993）からもすでに指摘があるように、８世紀代にみられる「口縁部を鋭角的に折り返す、ハケメを全く持たない甕」、三河型甕からの型式変化と捉えることがほぼ定説化している。以下、北村氏の見解を引用する。

北村氏は８世紀中葉から11世紀代の三河型甕(北村分類Ｂ３類）から清郷型鍋の系譜を提示している。なお、段階名称は本稿で補っている。

第１段階（ＮＮ－32号窯式期）　公文遺跡ＳＸ01出土資料（図２－１）

口縁部は外反ぎみに大きく開き、端部は丸くおさめれている。

第２段階（Ｏ－10号窯式期）　諏訪遺跡ＳＢ026出土資料（図２－２）

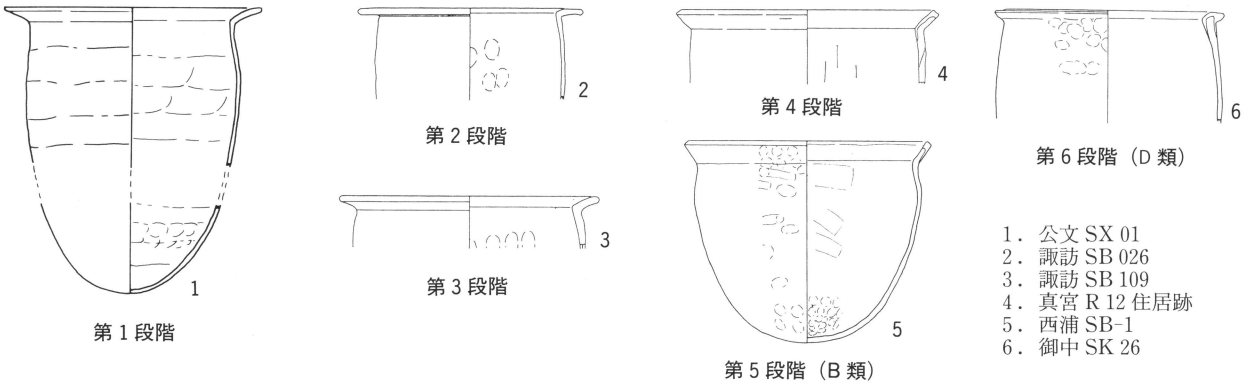
前代に較べ口縁部は短く、外反ぎみではあるが水平方向に開くものとなっている。なかには外反の度が強く端部が下方に向くものもみられる。

第３段階（ＩＧ－78号窯式期）　諏訪遺跡ＳＢ301出土資料（図２－３）

口縁部はより短く厚手で、斜め上方へ直線的に開くものとなっている。端部はまだ丸い。

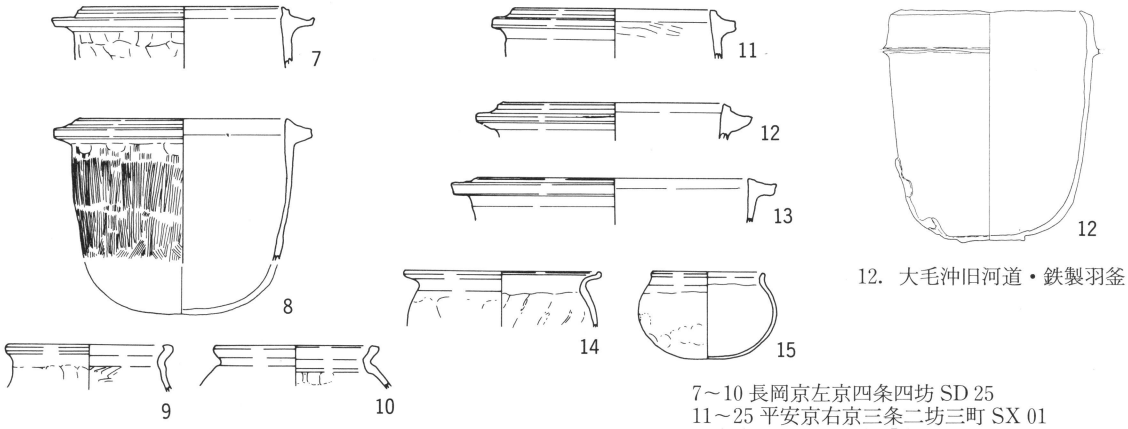
第４段階（Ｋ－90号窯式期）　真宮遺跡Ｒ12住居跡出土資料（図２－４）

三河甕系



1．公文 SX 01
2．諏訪 SB 026
3．諏訪 SB 109
4．真宮 R 12 住居跡
5．西浦 SB-1
6．御中 SK 26

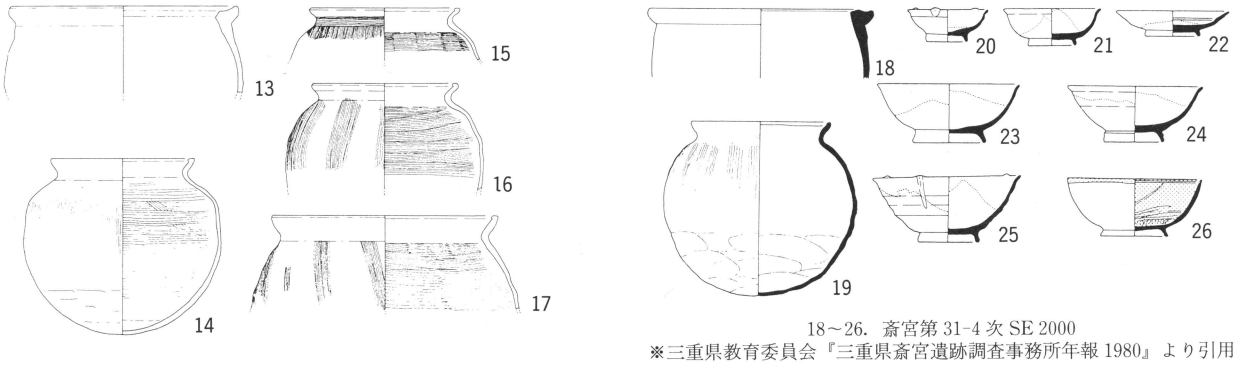
羽釜系



12．大毛沖旧河道・鉄製羽釜

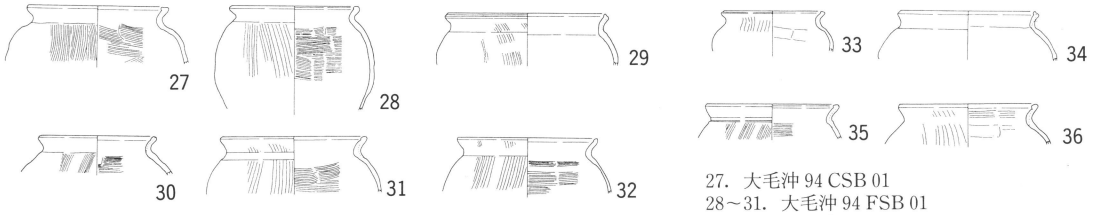
7～10 長岡京左京四条四坊 SD 25
11～25 平安京右京三条二坊三町 SX 01
※古代の土器研究会『古代の土器 2　都城の土器集成 II』より引用、再トレース

図 2　清郷型鍋の系譜



13～17．度会郡玉城町・波瀬 B 井戸枠内
※三重県埋蔵文化財センター『波瀬 B 遺跡発掘調査報告』より引用

18～26．斎宮第 31-4 次 SE 2000
※三重県教育委員会『三重県斎宮遺跡調査事務所年報 1980』より引用



27．大毛沖 94 CSB 01
28～31．大毛沖 94 FSB 01
33・34．大毛沖 94 FSB 02
32・35・36．大毛沖 94 FSB 03

図 3　三重県下の共伴資料（上段）と尾張北西部の併行資料（下段）S＝1/8

口縁部は前代のものに類似するが、より斜め上方を開く（外傾）傾向にあって、口縁端部が面をもつ点で異なる。

第５段階（Ｏ－53号窯式期）　西浦遺跡ＳＢ１出土資料（図２－５）

口縁部の形状は様々で、ａ．前代同様に外傾するもの、ｂ．肥厚し端面が幅広のもの、ｃ．口縁端部の上端を水平にナデて平坦面をつくるもの、ｄ．口縁端部を上方に向けるもの等がある。

第６段階（Ｈ－72号窯式期）　郷中遺跡SK26出土資料（図２－６）

外傾する短い口縁部は分厚く、上方を向く端面は強いナデにより凹み外端は断面三角形状を呈する。おそらくは前代のｃ、ｄの発達形態とみられる。

以上の見解に大枠では従う。ただ、本稿では第５段階以降に併行する清郷型鍋を２系統と考えている。したがって本稿分類に当てはめると、ａはＢ類、ｂ・ｄはＢ類とＣ類の折衷、ｃはＣ類とする。

羽釜系

新田　洋氏の「伊勢型鍋」に関する一連の研究のなかで清郷型鍋について、「この『清郷型』を甕としてではなく鍋、否、むしろ羽釜の源流として捉えられないだろうかと考えている。」と触れている（新田　1990ほか）。本稿では以下に示すように、羽釜の源流としてでなく、羽釜に系譜を持つものとして扱うため、羽釜（土鍋）形土器との比較からその系譜を探る。

同時期に相当する、平安京Ⅲ期での様相と比較すると、鉄製煮炊具の模倣品と思われる土師器に「羽釜（土鍋）」形土器がある（図２－７．８．11～13）。菅原正明氏の分類では「摂津Ｃ型」が相当する（菅原　1983）。特徴としては口縁部に鍔状の突起が付き、器形が清郷型鍋と酷似する。また、一方で伊勢型鍋の祖型とされている拙稿の分類で言えば土師器甕Ｅ類（９世紀後半以降）に類似する口縁部を折り返すタイプの甕も共伴する。時期的には清郷型鍋が成立する直前の10世紀前半に認められる。煮炊具としての器種構成は類似する。ただ、直接的な系譜はいまだ不確定ではあるものの、ここでは平安京Ⅲ期にみられる「羽釜」との類似性について指摘するに留める。

３．２　清郷型鍋の編年（図４）

さて、清郷型鍋はさきに示したように10世紀から12世紀前半までの土器群に共伴する。ここでは愛知県内の資料を中心に、清郷型鍋を大きく３期に大別し、さらに５小期に細別する。拙稿の編年と対比するとおおよそ第５段階以降に併行する。

Ⅰ期（西浦遺跡ＳＢ－１出土資料・図５－６～13）

清郷型鍋の出現期。口縁部が肥厚しないタイプがこの時期の指標になる。体部もやや長胴気味のタイプが主体になる。三河甕系のＡ・Ｂ類と羽釜系Ｃ類が相当する。現状ではＡ・Ｂ類は東三河を中心にみられる。尾張部では尾張国府跡（国府宮町大割・Ｑ地区）や大毛沖遺跡などでも確認できる。なお、尾張北西部では拙稿の甕Ｅ類が主体となる（永井　1995）。

Ⅱ期（清郷遺跡竪穴遺構・図６－１～25、郷中遺跡SK26出土資料・図７－１～５）

清郷型鍋の盛行期。清郷型鍋の特徴的な器形が確立する時期。現状では一括資料として細分できないが、型式学的にＤ類をａ期、Ｅ類をｂ期とする。形状はほぼ球胴化し、都城関連遺跡で出土する「羽釜」形土器とタイプが近づく。体部と口縁部の接合方法は、口縁部が体部の内外面を包み込むように接合するタイプが一般化する。

Ⅲ期（朝日西遺跡ＳＫ271出土資料・図７－12～23）

Ｆ類を中心にＥ類も残存する。口縁部の面取りも粗雑になり丸みをもつようになる。窯式編年ではⅡ期に重なると思われるが、清郷型鍋の型式変化を基準にあえて区別した。

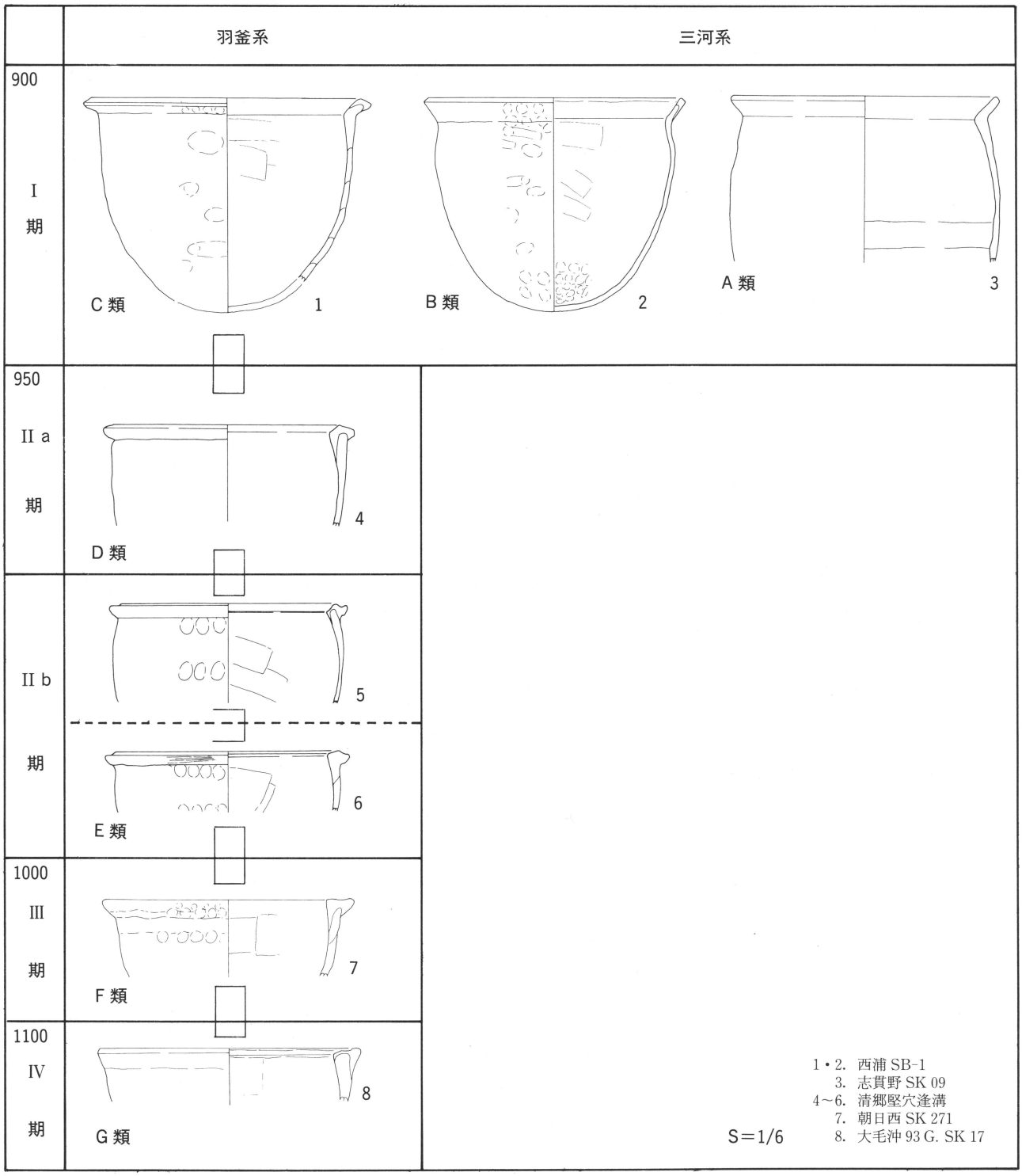

羽釜系
三河系
900
I
期
C 類
1
B 類
2
A 類
3
950
II a
期
D 類
4
II b
期
5
E 類
6
1000
III
期
F 類
7
1100
IV
期
G 類
8
S=1/6
1・2. 西浦 SB-1
3. 志貫野 SK 09
4～6. 清郷堅穴逢溝
7. 朝日西 SK 271
8. 大毛沖 93 G. SK 17

図 4　清郷型鍋の編年

Ⅳ期（大毛沖遺跡93Ｇ区ＳＫ17出土資料・図７－24～26）

清郷型鍋の終焉となる時期。口縁部の粗雑化が著しいＧ類あるいはＦ類が中心となる。出土資料が少ないため確証はできないが、藤澤編年第３～第４型式（古）と共伴する。この時期から伊勢型鍋が主流となり、清郷型鍋は姿を消す。

以上の時期に窯式編年と実年代を当てはめると次のようになる。

Ⅰ期はＯ－53号窯式期と共伴し、10世紀前半が相当する。Ⅱ期はＨ－72号窯式期と共伴し、10世紀後半～11世紀が相当する。清郷型鍋からはさらに２時期細分できる。Ⅲ期はおそらく藤澤編年第２型式から第３型式に共伴すると思われる。この時期は消費地・生産地ともに遺跡数が少なく編年的にも不安定な時期である。11世紀代を想定しておく。Ⅳ期は藤澤編年第３～第４型式（古）と共伴し、12世紀前半が相当する。

４．清郷型鍋再考

佐野氏は清郷型鍋を「東海地方における広域交易圏を背景にして成立した」と捉えている（佐野1990）。本稿は佐野氏の見解に大枠で同意する。すなわち、海上あるいは河川による水運流通商品として評価する点である。しかし、本稿のように「平底から丸底へ」の変遷に視点を置くと、「火所」事情について評価せねばなるまい。

そこで、古代から中世の住居内の火所事情について仮想を進めると次のように言える。古代的生活様式がカマドを火所の中心施設とすれば、中世的生活様式はイロリ（囲炉裏）が相当する。カマドで使用する煮炊具が甕形土器とすると、イロリで使用するのは鍋・釜となる。住居の形態は古代では縦穴から平地住居へと変化し、中世では堀立柱住居となる。住居内での火所は古代では床直、中世では床上となり、明らかに古代と中世の生活様式に歴然とした差異が認められる。清郷型鍋はこのような生活様式の画期に登場する煮炊具と言える。だから出現期の形態がやや長胴気味の丸底となり、羽釜を模倣する形態へと変遷する。次世代に一世風靡する伊勢型鍋の原型は清郷型鍋にあったのかもしれない。

清郷型鍋を過大評価してしまった感もあるが、清郷型鍋が生活様式の変革期に流行する煮炊具と位置づけることが今後の課題でもある。そのためにも今後胎土分析の結果により生産地の同定が可能となれば、清郷型鍋の商品価値が明らかになる。さらに火所の問題も遺構の検出例が増加すればおのずと解決する問題でもある。また、遺構に伴う一括資料の好例により古代から中世への移行期の土器編年も再整備されると思う。このように問題は多岐にいたる。清郷型鍋を皮切りに今後古代から中世への生活様式の変革を考える上で残された課題は多い。

最後になりましたが、下記の方々には様々なご助言・ご協力あるいは資料の実見・再実測の機会を与えていただきました。記して感謝いたします。(以下敬称略・順不同)

岩野見司・赤塚次郎・城ヶ谷和広・土本典生・松井直樹・須川勝以・贄元洋・前田清彦・林　弘之・森　泰道・堀木真美子・高田恵理子

参考文献

岩野見司　1967「古代・中世における手工業の発達(2)－東海－Ⅳ土師器」『日本の考古学　歴史時代上』Ⅵ　河出書房新社

岩野見司　1974 第３節「浅井町　(7)清郷遺跡」『新編一宮市史　資料編４』　一宮市史編纂室

菅原正明　1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会

新田　洋　1985「平安時代～中世における煮炊用具－「伊勢型」鍋－に関する若干の覚書」『三重考古学研究１』　三重考古学談話会

野末浩之　1988「愛知県内における11～13世紀の煮沸形態」『愛知県陶磁資料館研究紀要７』　愛知県陶磁資料館

新田　洋　1988「三重県における古代末～中世にかけての土器様相」『マージナルNo.９』　愛知考古学談話会

佐野五十三　1990「清郷型甕の研究」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅲ』　静岡県埋蔵文化財調査研究所

新田　洋　1990「三重の中世食生活を垣間見る（上)」『Mie History vol.１』　三重歴史文化研究会

小林久彦　1990「須恵器出現以降の土師器の変遷」『三河考古第３号』　三河考古刊行会

池本正明　1990 第６章考察「２．志貴野Ⅱ期にみる土師器煮沸具」『志貴野遺跡・小島遺跡』　㈶愛知県埋蔵文化財センター

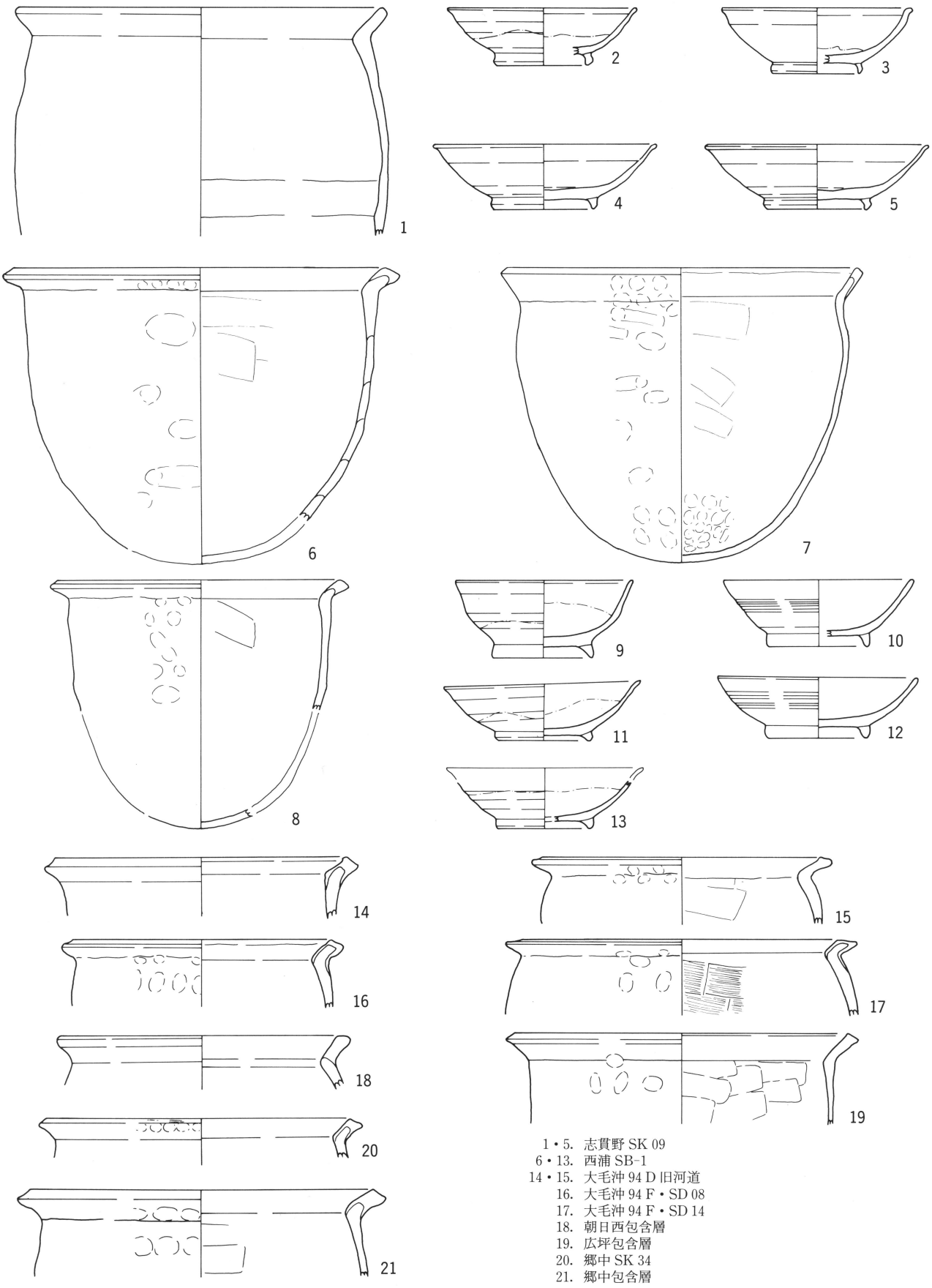
城ヶ谷和広　1990「古代尾張の土師器～６世紀後半から11世紀の様相～」『年報・平成２年度』　㈶愛知県埋蔵文化財センター

新田　洋　1991「三重の中世食生活を垣間見る（中)」『Mie History vol.３』　三重歴史文化研究会

北村和宏　1991 第６章考察　第２節「付　東三河地方における８～15世紀代の土器」『森岡遺跡・淡洲神社北遺跡』　㈶愛知県埋蔵文化財センター

松井直樹　1993 第4章まとめ第2節「(2)煮炊具について－清郷型甕成立の直前－」『八ッ面山北部遺跡Ⅲ－蔵屋敷地区－』西尾市教育委員会

永井宏幸　1994「奈良・平安時代の土師器甕について」『年報・平成６年度』　㈶愛知県埋蔵文化財センター



1・5. 志貫野 SK 09
6・13. 西浦 SB-1
14・15. 大毛沖 94 D 旧河道
16. 大毛沖 94 F・SD 08
17. 大毛沖 94 F・SD 14
18. 朝日西包含層
19. 広坪包含層
20. 郷中 SK 34
21. 郷中包含層

図5　清郷型鍋Ⅰ期　S＝1/4

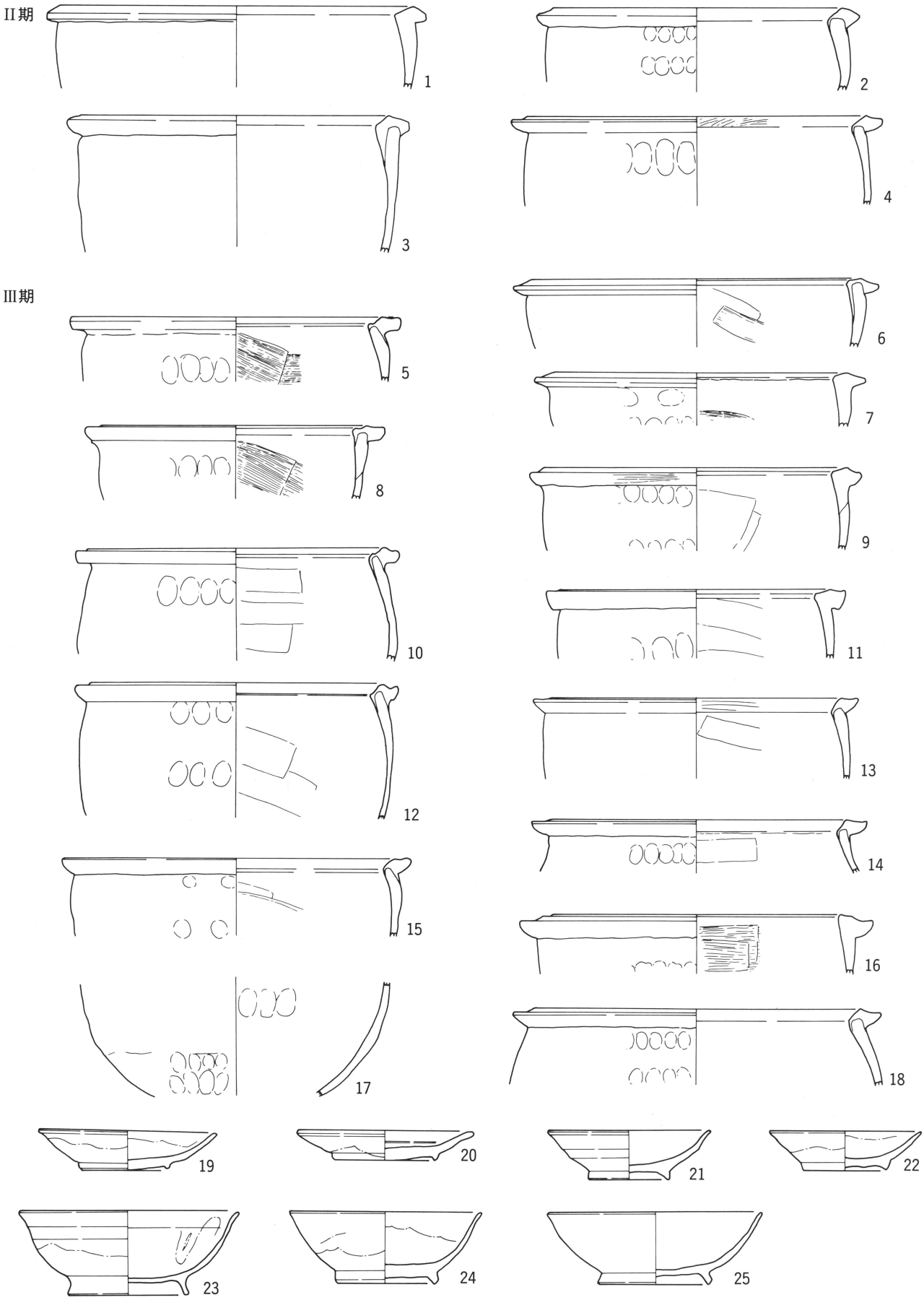


図6　清郷型鍋II～III期（清郷・竪穴遺構）S＝1/4

II a 期

1～5. 郷中 SK 26

II b 期

6～11. 清州城下町黒褐色砂質土層

III期

12～23. 朝日西 SK 271
24～26. 大毛沖 93 GSK 17

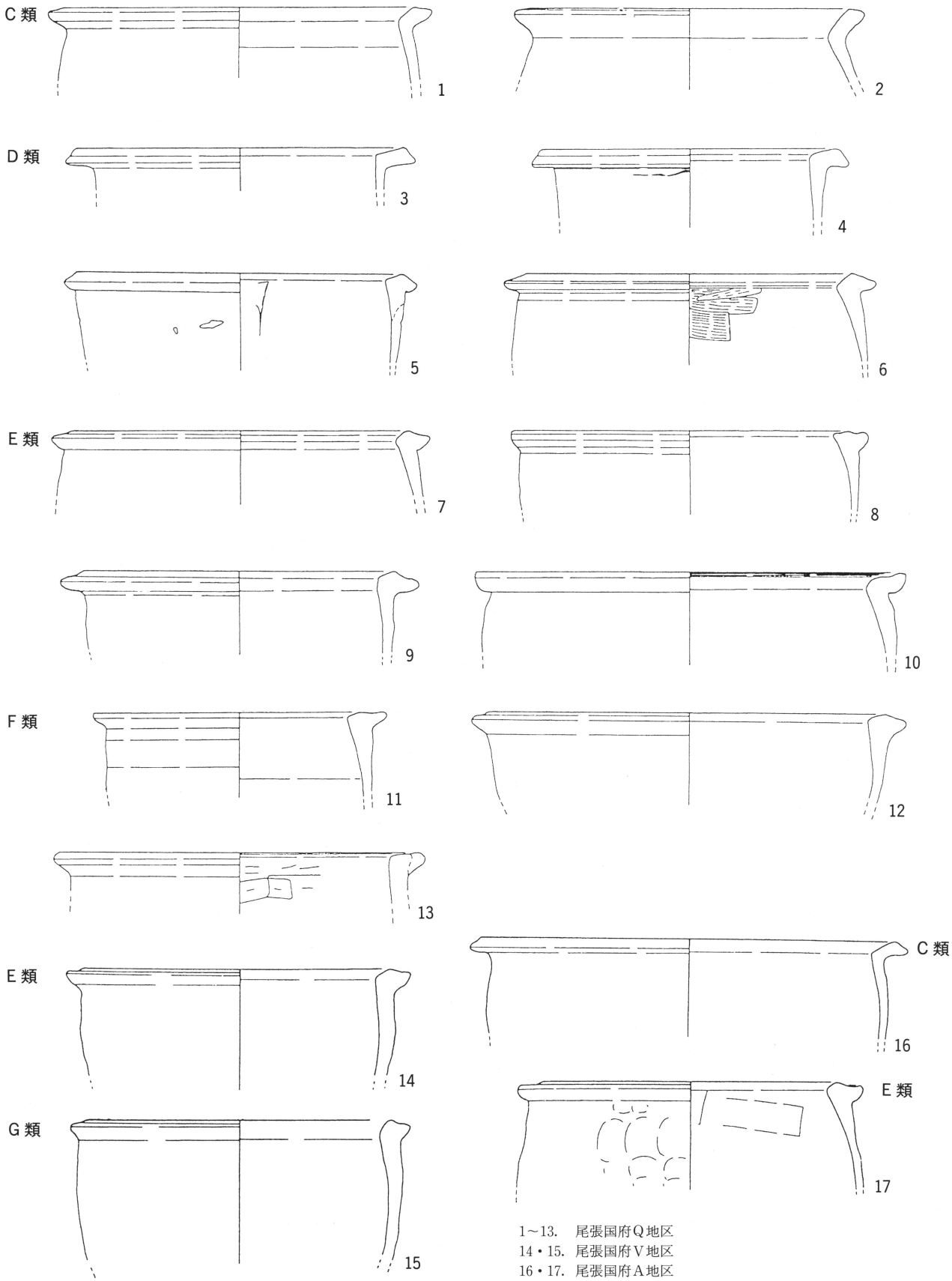
IV期

VII期

VI期

27・28. 朝日西　包含層
29. 大渕 SE 20

図 7　清郷型鍋 II ～ IV 期　S＝1/4



1～13.　尾張国府Q地区
14・15.　尾張国府V地区
16・17.　尾張国府A地区

図8　清郷型鍋Ⅰ～Ⅳ期　S＝1/4

表Ⅰ　清郷型鍋出土遺跡地名表（愛知県）

遺　跡　名	所　　在　　地	出土遺構など	分類、時期	文献
清郷	一宮市浅井町	縦穴遺構	D・E類，II期	1
大毛沖	一宮市大字大毛	93G　SK17・旧河道ほか	C・G類，I・Ⅳ期	なし
大平	尾西市三条	井戸遺構	D類，IIa期？	2
尾張国府	稲沢市国府宮町	Q地区ほか	C～G類，I期～Ⅶ期	3～7
堀之内花ノ木	稲沢市堀之内町	SD100	G類，Ⅳ期	8
朝日西	西春日井郡清洲町大字朝日	SK271ほか	C～F類，I期～Ⅲ期	9
土田	西春日井郡清洲町大字土田	灰釉系陶器・伊勢型鍋と共伴？	G類，Ⅳ期	10
清洲城下町	西春日井郡清洲町大字清洲	黒褐色砂質土層	E類，II期	11
大渕	海部郡甚目寺町大字大渕	SE20，伊勢型鍋と共伴	G類，Ⅳ期	12
玉ノ井	名古屋市熱田区玉の井町	SD02，灰釉陶器と共伴？	F類？，Ⅲ期？	13
松河戸	春日井市松河戸町	89Ⅰa　SD01	D類，IIa期	14
大木之本	東海市養父町		D類，時期不明	15
松崎貝塚	東海市大田町		E類，時期不明	16
西屋敷	刈谷市小山町		A類？，時期不明	17
矢作川河床	岡崎市域内矢作川河川敷	灰釉系陶器・伊勢型鍋と共伴？	G類，Ⅳ期	18，19
真宮	岡崎市真宮町	R12号住居跡	B類，I期	18
室	西尾市駒場・室町	SD74、羽釜と共伴？	G類，Ⅳ期	20
志貴野	西尾市志貴野町	SK09	A類，I期	19
八ッ面山北部	西尾市八ッ面町	蔵屋敷地区SD05ほか	C・F類，I・Ⅲ期	22
門前	蒲郡市清田町	大溝	E類，II期	21
広坪	額田郡幸田町大字桐山	灰釉陶器と共伴	C類，I期	なし
馬場	新城市竹広	住居跡およびその周辺	C～E類，I～II期	23
波入江	豊橋市老津町	灰釉系陶器などと共伴	G類，Ⅳ期	25
大沢A2号窯	豊橋市大岩町	窯体内で灰釉陶器と共伴	D・E類，II期	なし
公文	豊橋市牟呂町	SK－8	E類，II期	26
桜	豊橋市西高師町		B類，I期	27
市道	豊橋市牟呂町	SK166ほか	C～D類，I～II期	なし
山ノ入	豊川市国府町山ノ入		E類，II期	28
郷中	豊川市三谷原町	SK26．36ほか	C～E類，I～II期	29
麻生田大橋	豊川市麻生田町	I2B25ほか	A・E類，I～II期	30
牧野城	豊川市牧野町	SK305	E類，II期	31
赤塚山	豊川市市田町	SK25	C類，I期	32
西浦	宝飯郡一宮町大字金沢	SB－1	A～C類，I期	33
金山	宝飯郡一宮町大字金沢		C類，I期	34
黒谷B	宝飯郡一宮町大字足山田		B・D～G類，I～Ⅳ期	35
万場垣内	東加茂郡旭町大字牛地		C類，I期	36

「清郷型鍋」掲載文献（愛知県）

1．一宮市史編纂室『新編一宮市史資料編四』(一宮市史編纂室，1974)

2．尾西市教育委員会『大平遺跡発掘調査報告書』(尾西市教育委員会，1990)

3．稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書（Ⅰ）』(稲沢市教育委員会，1979)

4．稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書（Ⅱ）』(稲沢市教育委員会，1980)

5．稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書（Ⅳ）』(稲沢市教育委員会，1982)

6．稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書（Ⅴ）』(稲沢市教育委員会，1983)

7．稲沢市教育委員会『尾張国府跡発掘調査報告書（Ⅵ）』(稲沢市教育委員会，1984)

8．㈶愛知県埋蔵文化財センター『堀之内花ノ木遺跡』(㈶愛知県埋蔵文化財センター，1991)

9．㈶愛知県埋蔵文化財センター『朝日西遺跡』(㈶愛知県埋蔵文化財センター，1990)

10．㈶愛知県埋蔵文化財センター『土田遺跡』(㈶愛知県埋蔵文化財センター，19)

11．㈶愛知県埋蔵文化財センター『清洲城下町遺跡』(㈶愛知県埋蔵文化財センター，1991)

12．㈶愛知県埋蔵文化財センター『大渕遺跡』(㈶愛知県埋蔵文化財センター，1991)

13．名古屋市教育委員会『石神遺跡・玉ノ井遺跡・高蔵遺跡（第7次）発掘調査報告』(名古屋市教育委員会，1995)

14．㈶愛知県埋蔵文化財センター『松河戸遺跡』(㈶愛知県埋蔵文化財センター，1992)

15．東海市教育委員会『大木之本遺跡発掘調査報告書』(東海市教育委員会，1991)

16．東海市教育委員会『松崎貝塚第２次発掘調査報告書』(東海市教育委員会，1984)

17．刈谷市史編さん『刈谷市史第５巻』(刈谷市史編さん，1989)

18．新編岡崎市史編集委員会『新編岡崎市史　史料考古下16』(新編岡崎市史編集委員会，1989)

19．㈶愛知県埋蔵文化財センター『志貴野遺跡』(㈶愛知県埋蔵文化財センター，1990)

20．㈶愛知県埋蔵文化財センター『室遺跡』(㈶愛知県埋蔵文化財センター，1994)

21．蒲郡市教育委員会『門前遺跡』(蒲郡市教育委員会，1980)

22．西尾市教育委員会『八ッ面山北部遺跡Ⅲ－蔵屋敷地区－』(西尾市教育委員会，1993)

23．愛知県教育委員会『豊川用水路関係埋蔵文化財調査報告』(愛知県教育委員会，1967)

24．㈶愛知県埋蔵文化財センター『諏訪遺跡・杉山端城跡』(㈶愛知県埋蔵文化財センター，1989)

25．豊橋市教育委員会『山ノ入遺跡発掘調査報告書』(豊橋市教育委員会，1985)

26．豊橋市教育委員会『公文遺跡（Ⅱ）』(豊橋市教育委員会，1989)

27．豊橋市教育委員会『桜遺跡試掘調査報告書』(豊橋市教育委員会，1989)

28．豊川市教育委員会『山ノ入遺跡発掘調査報告書』(豊川市教育委員会，1985)

29．豊川市教育委員会『郷中・雨谷』(豊川市教育委員会，1989)

30．豊川市教育委員会『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』(豊川市教育委員会，1993)

31．豊川市教育委員会『牧野城』(豊川市教育委員会，1994)

32．豊川市教育委員会『赤塚山』(豊川市教育委員会，1994)

33．一宮町教育委員会『一宮東部地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(一宮町教育委員会，1987)

34．一宮町教育委員会『一宮東部地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』(一宮町教育委員会，1988)

35．一宮町教育委員会『城山』(一宮町教育委員会，1995)

36．愛知県教育委員会『矢作ダム水没地域埋蔵文化財調査報告』(愛知県教育委員会，1968)